

飢えと病気に生還2割弱

ニューギニア戦線に赴いた元軍医

三好正之さん(97)＝山口市

「戦争は絶対しちゃあならん」。記憶をた規さん(72)が生まれたどり、語気を強めて繰り返す。太平洋戦争末期に過酷を極めたニューギニア戦線に陸軍の軍医として赴いた。連隊の生還者は2割を下回った。死因の多くは栄養失調と病気だった。

途絶えた補給

44年3月、軍用機でニューギニア島西部ホーランシア(現ジャヤプラ)の飛行場に1ランシア奪還を命じ、到着。さらに約3000キ離れたサルミに飛んで連隊と合流した。直後、ホーランシアは連合軍に奪われた。制

1943年に陸軍軍医学校を卒業。山形に本部を置く歩兵第224連隊に配属され、連隊の配置転換に伴い南

「戦争は絶対しちゃあならん」と話す三好さん

つなぐ

戦後70年

戦争の記憶



「戦争は絶対しちゃあならん」と話す三好さん



ニューギニアに赴く前の三好さん(左から2人目)を囲んだ家族。母の故チトセさん(左端)、妻の故幸子さん(左から3人目)と長男正規さん

(柳岡美緒)

上層部の欲で死者多数

「戦況を見誤り、22人が命を落とした。」

「若い人にこれだけの権化が戦争につながった。殺し合いに『後方支援だから安全』ということはない。犠牲になった一人一人にいる家族が、どれだけ悲しむか。戦争は絶対にしなきゃあならんもん」

クリック

前に次第に制海権、制空権を失って補給が途絶え、日本軍の部隊はジャングルに追い込まれた。国が把握しているニューギニア島とその周辺での戦死者の概数は18万6000人。9万6120体の遺骨が未帰還となっている。

を背負い、敵の目を逃れて夜や雨の中、密林を歩いた。

5月、米軍の駐留地に夜襲をかけたのが初めて。戦況は悪化。最期になるかもしれない。一人でも米兵を殺さなきゃならん。軍

食料や薬品、弾薬などの補給は途絶えた。それでもフリーピンに。ニューギニア島西部ホーランシアの飛行場に1ランシア奪還を命じ、到着。さらに約3000キ離れたサルミに飛んで連隊と合流した。直後、ホーランシアは連合軍に奪われた。制

44年3月、軍用機でニューギニア島西部ホーランシア(現ジャヤプラ)の飛行場に1ランシア奪還を命じ、到着。さらに約3000キ離れたサルミに飛んで連隊と合流した。直後、ホーランシアは連合軍に奪われた。制

46年6月に復員するまで約2年間、サルミから採れるでんぷんは貴重な食料。農場跡にイモを植え、サゴヤシの中のとじ虫も焼いて食べた。それでも足り

た。後方の部隊でも多くの犠牲者が出たのを覚えている。8月、無線が爆撃で。地は西へ移ったよう

だ。だが引き続き、飢えと感染症が連隊を襲う。姿まるで幽霊

トカゲや、サゴヤシから採れるでんぷんは貴重な食料。農場跡にイモを植え、サゴヤシの中のとじ虫も焼いて食べた。それでも足り

兵士たちは20代後半の自分より若い者が多かった。「みんな母親の名を呼んで死んでいった」。亡きがらは、その場で浅く地面を掘って泥をかけた。3347人の連隊は、2722人が命を落とした。「戦況を見誤り、

手柄欲しさに死者を多くした軍上層部を今でも憎んでいる」

復員後、古里の山口市阿知須で亡父の内科医院を再開。診療科を増やして阿知須共立病院とした。「ニューギニアで助けられなかった兵士を思い、365日医師として働いた」と振り返る。現在は同病院会長の肩書だ。

連隊の慰霊祭は山形市で毎年9月に営まれる。昨年、生還者の参列は数人。その一人で、戦地で足を切断して治療した元兵士が亡くなった。「私も年を取った。ことは(慰霊祭に行かないと決めて

いる」と話す。「若い人にこれだけの権化が戦争につながった。殺し合いに『後方支援だから安全』ということはない。犠牲になった一人一人にいる家族が、どれだけ悲しむか。戦争は絶対にしなきゃあならんもん」